

正宗白鳥

坪内逍遙



坪内逍遙



「僕は学生時分は極楽トンボで、ふらふらと日を送った。文学者で、人生がどうのこうのと、煩悶苦悩したりするようになったのは、國木田獨歩なんかからはじまったので、二葉亭だって、気楽にかまえて若い日を送っていたのだ」と、坪内逍遙先生が述懐されるのを、私は聞いたことがあった。

「君はいつも夢を見ているような人間だったと、同窓の某君（有賀長雄か）が云っていた」と、いつか、先生が

追懐されたことがあった。

「学生時代には、新富座で團十郎の芝居を観るのが、一番の楽しみであった」と云われたこともあった。

少年時代に坪内先生の家塾に寄寓していた長谷川如是閑は、「ある心の自叙伝」のなかに、「坪内逍遙などは、美濃の産で、十八の歳に東京に出たが、大学を出るところには、すっかりあの猛烈な名古屋訛りを克服して、立派な東京語を話すようになって、ようやく小説を書きだしたのであった」と言っている。

明治十年代に、新日本の東京に於ける学生生活を終え

た坪内逍遙事（春の屋おぼろ）は、評論「小説神髓」と創作「当世書生氣質」とを一度期に公表して、新時代の文学の先駆者として注目されることになったのである。早くから、徳川時代の戯作者のさまざまな作品に耽溺していた逍遙も、西洋の文学論や小説類を手あたり次第に読んでいるうちに、直覚のすぐれた彼は、在来のような小説ではいけないと思いついたのであつた。

「書生氣質」は、その頃の学生 of 生活振りを写實的に叙述したもので、作者の志したほどの新味なく、文章にも趣向にも、古い戯作の趣きが瀰漫びまんしているのだが、それ

でも、あの時代の、幼稚な政治小説や風俗小説に比べると、多少の真実味があり、あの頃の東京の世相がいくらか伺えるところに、この小説の文学史的価値があると云っている。封建日本が崩壊して、文明開化の新日本が出現しているという青年の気持が、そこに髣髴として現われているだけでも面白い。そして、「小説神髓」と「書生氣質」とに刺戟されて、新進作家が続出して、明治文学史が栄えるようになったのである。これは文学に志す者の誰でも知っていることである。そして、長谷川二葉亭が、異色ある新作「浮雲」を提げて逍遙を訪ねたり、



尾崎紅葉・幸田露伴が並んで創作界に出現したりするようにもなった。

ところで、逍遙は早稲田の学校教師になっているうちに、彼の立案にて、文学科設立の運びがついたのであったが、学校経営者の考えはどうであったか分らぬとして、逍遙自身は、ここで芸術教育を施さんとしたものらしい。年少の頃、極楽とんぼのふわふわと飛翔して夢を見ていた彼である。青年を集めて、自分の好みになつた芸術教育を試みんと夢みていたのだ。和漢洋の戯曲の講義もあれば、演劇の稽古もあった。学生のうちにはそれをい

い事にして、遊芸に身を入れるものもあつた。当時は官学全盛で、私学は蔑視されていて、早稲田の文学部などは、帝国大学の文科と並び立てるものではなかつた。事実、早稲田の授業は帝大卒業者の腰掛け仕事と云つた感じもあり、安っぽいものであつたが、芸術味は、文科創業時代の早稲田にはあつたのだ。「何が芸術か」とケチをつければつけられるかも知れない。甚だ御安値なものであつたかも知れない。しかし、兎に角、学究的教育の帝大に比べて、逍遙の早稲田は芸術的であつたのだ。

ところが、それでいい気になると、文学部の学

生は、卒業しても、容易に生活の道が得られないことが、次第に分りだした。それで逍遙先生は自責の念に馳られ、こうして子弟を誤ってはならないと気づかれ、芸術教育は取止めということになったのだ。卒業すれば中学教員の資格の得られるように、教育方法を変えた。そして、自然に文部省の支配を受けるようになった。逍遙の最も嫌っていた官僚に監視されるようになった。かくて、逍遙の芸術教育の夢は破れたのである。

その後、また、文芸協会を創設して、演劇革新の大事業を企てたのであったが、この夢も無慙むざんに破れて、演劇

に与えた効果は、自由劇場や築地小劇場の小山内薫にも及ばなかった。

かつて、島村抱月は、「坪内先生が小説の創作を止めて戯曲を書かれましたのは、後進の紅葉・露伴が活躍しだしたためであろう」と、抱月独特の考え深そうな声で云った。これは小説では紅露には及ばないと、反省されたと云う訳なのだ。

逍遙先生の夢は次から次へと破れ破れて、せめて、シエークスピアの翻訳でも完成しようと思されるようになったのである。この面倒な仕事をよくやり通されたも

のだと、その辛抱力に私は驚嘆している。この翻訳は上乘の翻訳ではない。しかし、日本の歌舞伎化した翻訳として独特の妙があるのだ。芸術のうちでも、歌舞伎を最も好み、その鑑賞と研究に没頭していた逍遙は、沙翁の戯曲に於て自己を現わしたようなものだ。他の翻訳家の西洋文学翻訳とは異り、これには、名古屋の有名な貸本屋「大惣」の戯作ものを、少年時代に読尽して以来の逍遙一生の芸術修養を傾け尽した翻訳である。

芥川龍之介の遺稿の断片語に「憐むべし、老桜痴、更に憐れむべし老逍遙」といつているのが、かつて私の目

についた。芥川は逍遙の沙翁訳を蔑視したらしかつたが、それは没分曉ぼつぶんきやうである。昔帝大の連中が私学の徒を徒らに見下していたのと同様の、官僚的妄言である。一生の夢の破れ破れした逍遙を憐れむのは、そこに文学的情趣があつて面白いが、沙翁訳は、世界の沙翁訳のなかに出して、異色ある名訳であると、他の外国語を知らぬ私は空想している。

明治文学評論史上最初の論戦として「没理想」に関する逍遙鷗外の論戦は有名であるが、鷗外の方では、歐洲古今の文学史美学史を背景としたのに、逍遙の方では何

もなかったのだ。大砲や機関銃に対して、手製の竹槍で闘わんとしたようなものであった。しかし、鷗外が独創に富み、逍遙が凡庸であつたのではない。それどころか、逍遙先生が、幾冊かのシェークスピアを読んで、この脚本作家の作品には、勸善懲惡の主旨が宿っていないのみならず、何の理窟も現われていないで、自然の姿そのままであることを感じ、「没理想」の作品であると断じたのは、あの頃の日本の文学者としては、独創の批判力を有っていたと言つていいのだ。没理想論の発端たる「マクベス評釈」の緒言のうちに、沙翁は「天稟の詩眼によ

く人間を觀破し、不偏公平の筆をもて自然の有りのままを描きしならんか」と云っている。自然の有りのままを描かんとは、田山花袋などの熱説したところで、自然主義の本領とされていたものである。逍遙主宰の早稲田文学は「記実」を志し、「談理」に耽らざるべしと、執筆態度を明かにしていたが、この態度を小説の上につつすと、現実の客観的描写を是とすることになるのである。

「坪内選集」のうち、最も内容が豊富で、読んで啓発されるものは、演劇に関する記録、評論、感想である。批判そのものが必しも事物の心核に触れているとは云えな



いにしても、研究径路は用意周到である。歌舞伎に関する文献としては、最も重きを置くべきだと思われる。逍遙は「書生氣質」以後、「妹と脊鏡」「細君」などの小説を続々発表されたが、いつとなしに、小説は執筆されぬようになり、日本の演劇の研究に身を入れられ、研究とともに、大仕掛けに脚本執筆に、旺盛な創作慾を注かれるようになった。「桐一葉」「牧の方」などの史劇が続出した。明治以後は日本の演劇も西洋にかぶれて、脚本の選択にも旧弊を脱したものを心掛けるようになっていたとは云え、文学者の新作の上演は容易に実現されな

かった。それで、「桐一葉」のような大作も、劇場経営者にも俳優にも取上げられなかったのだが、偶然日露開戦の時に、芝翫、我當（後の歌右衛門、仁左衛門）一座によって東京座で上演されることになった。これは、演劇史上に特記すべき事件であった。つづいて戦時中に、森鷗外の「日蓮聖人辻説法」が、歌舞伎座で、八百蔵（中車）羽左衛門などによって上演された。当時私は読売新聞に入社して、劇評をやっていたので、舞台内外の事情をよく知っているが、東京座で「桐一葉」上演を勝手に決めて、その準備もして、座付作者の一人をして、熱海

滞在の逍遙を訪問させ、その旨を伝えさせたのであった。著者の権威を無視したような劇場の態度に、逍遙は激怒して、上演拒絶を申渡したので、劇場の使者はびっくりして、平身低頭弁解これつとめた。逍遙も条件付に許可することとなり、座付作者たる使者は徹夜して、逍遙の指図を受けて脚本の訂正をしたりした。「桐一葉」中の男女の主役は、芝翫我當一生の当り役となったほどで、見物受けもよく、劇場の当事者をして、文学者の新作に多少の敬意を払うような気持にならせたのであった。

逍遙は、小説からはじめて、脚本を書き、新舞踊も創

作し、童話も書き、演劇の実演にも力を注ぎ、文学評論・演劇評論は終始これを筆にし、翻訳業だけでも一生の大事業のように実行した。私立学校の教師を本職として、老境に達するまで多量の時間をその方に捧げながら、よくもあれほどの多量の仕事が出来たものと思われる。いろんな方面で、自から先に立って世を啓発せんとする気構えを持っていたように想像される。映画のシナリオも書こうと考えていられたらしい。

鷗外も、本職の医業以外に、文学方面でも、逍遙のようになさまざまな事を行った。鷗外、逍遙は最初からいろ

いろいろな意味で対立していた。二人の態度、業績を比べて見ると、新日本の文学者の働き振りや、文壇人それぞれの文学観が分って興味になるのである。概して逍遙より鷗外の方が、後進の文学者により重く見られていた。ことに近年は、鷗外は重要視され、逍遙は軽視されている。私なども鷗外の評論・作品翻訳から学んだところは多い。しかし、私は鷗外に官僚臭があったと思っている。鷗外を尊敬していた花袋も、「鷗外さんは官僚的だね。それから文学論は大抵西洋の紹介見たいなものだね」と、気軽に批評したことがあった。逍遙は直覚はすぐれてい

たと思う。歌舞伎の批判のうちには、他の学究的演劇研究者の思い及ばないところがあるのだ。

逍遙は、新楽劇をも思いつき、楽劇観を発表するとともに、その見本として、「新曲浦島」を製作したのであったが、その頃、鷗外も「玉篋たまくしげふたりうらしま 両浦島」を発表していた。どちらも浦島を題材としたのも面白いがその取扱い振りに両者の面目が現われているから面白い。「新曲浦島」では、青年が空想に捉われて厭世に陥り、父母の戒めに背き蓬萊に遊んで、歓楽に耽っていたが、月日を経るうちにホームシックを起し、帰郷して父母を誘って来

ようと決した。そして帰郷すると、夢から醒めたように、

「我れ或時は影を追い、又或時は形のみ、老いぼれにけ

かたわぐるま

あしよわぐるまときよ

なゝよ

り片輪車の、足弱車時勢にも七代おくれし愚痴の我れ」

と、空想界に歳月を費せしことを悔い、しかし、「あら、

頼もしの青年わかうどやな、蓬菜とこよの相うつゝ世に見ん折も遠か

らじ、うれしさよ」と、新時代の青年に期待した。作者

は理想の実現を望み且つ信じている。

ふたりうらしま

「両浦島」では、浦島太郎は龍宮の乙姫に向い、「こ

のとし月の平和に倦み、今は事業のしたはしくなりぬるものか」と云っている。「をことは自然、われは人、を

ことは物の、おのづから成るをよろこび、われはまた、ことさらに事を為さんとすれば、ふたりの心は合ひがたし」と云っている。そして、故郷に帰ってから、子孫に会い、「おもふは先祖、行ふは子孫にこそあれ」と云い、また、「事業をわかき、わがすゑに、伝へ行ふことを得る、これも一つの不老不死」と云っている。

この二つの作品はそれぞれの面白味はあるが、優劣は判じ難い。二つの作品を通じて、作家の人生観は窺い得られるが、どちらにも手軽な楽天主義である。初世浦島は、末孫の浦島に、軍用金たる金銀を与えてその遠征を見送



って何等の懷疑不安もない。「新曲浦島」では厭世の雲晴れて、天国がこの世に来ることを無雑作に唄っている。

終に云う。逍遙の外国文学研究では、シェークスピアは本領であるが、「イブセン研究」も甚だいいものである。外国文学研究は近来盛んで、いろいろな研究書類が出ているが、よく分るように説明して、的確に要を得ているものは尠い。私は好学の青年にこの書の一読を勧めたい。



日本文学電子図書館

---

坪内逍遙

著 者：正宗白鳥

制作者：宮澤一郎

底 本：「白鳥全集」第6巻、新潮社

昭和40年8月25日 発行

昭和51年8月30日 セット版

日本文学電子図書館